歳々年々人同じからず

環境科学部長／環境科学研究科長
井手　慎司

早いもので、今年もまた桜の季節が訪れようとしている。卒業生を先日、送り出したばかりだと思っていたら、すぐにもう入学式である。この原稿を執筆している時点で、彦根でのソメイヨシノの今年の開花時期は四月の五日前後とのこと。例年よりも遅く、六日の本学入学式に間に合うかどうか微妙なところだが、学部棟から見える、キャンパス内の環濠の水面に映えるあの桜花をぜひ新しい学生たちと眺めてみたいものである。まさに「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」といった心持ちだろうか。

ふり返れば、昨年の四月、環境科学部は新たな 5 人の教職員を迎えて新年度をスタートした。年度途中にあと2人が加わる。これは、取りも直さず、それだけの人数の仲間がその前年度に学部を去っていったことの裏返しでもある。そして、この三月末にも、4人の退職者を送り出すことになっている。一抹の寂しさはあるものの、誰かが去り、誰かが代わりに入ってくる……それが組織の「宿命」というものなのだろう。まして、ここは大学であることから、教職員に限らず、本学部であれば毎年 180 人前後の学生が巣立っていき、また、入学してくるわけである。そのような絶え間ない新陳代謝によって、大学という組織はその活力を維持しているのかもしれない。

かくいう私も、増田佳昭教授の後を受け、昨年四月から学部長を務めることになった。そのとき前学部長から引き継いだ大きな宿題、すなわち学部長としての最初の大きな仕事が学部再編に関する議論である。

全国に先駆け「環境」を冠した学部として本学部が誕生して 20 有余年が経つ。この間、多くの他大学で類似の学部学科が創設され、環境問題そのものも変容してきた。まだまだ解決にほど遠い問題も多い一方で、変質してきた、あるいは新たに顕在化してきた問題も少なくない。18 歳人口の減少など、大学全体を取り巻く状況の変化にも厳しいものがある。もちろん、そういった時代や周りの変化に対応するべく、学部として変わっていかなければならない、という論理もあるだろう。しかし、先に述べたことを踏まえれば、変わらない組織というもの自体がそもそもないわけで、「変わらないためにも、変わり続けなければならない」というのが私のひとつの結論である。「年々歳々花相似たり」とみえる桜ですら、毎年同じではないことを――変わることを止めるとは、それは枯死を意味することを――私たちは知っている。ただし、変わってはならない、堅持しなければならない根っ子のような部分というものは必ずあって、要は、その根っ子の部分が何なのかという点と、それを守るために、何をどのように変えていかなければならないのか、という点を見定めることが再編の議論における要の所だろうと考えていた。

その後、多少の紆余曲折はあったものの、年度の途中から学部再編に向けた議論は本格化した。現時点でその結果を公表するのは時期尚早だろうが、大きな方向性については学部として合意に達することができたと考えている。熱心に議論していただいた、教員各位にこの場を借りて感謝したい。

とはいえ、組織の再編だけが、我々が変わり続けなければならないことの全てではない。たとえば、この学部年報であっても、変わらなければならないところはあるだろう。教員個々の研究のテーマや方法、あるいは学生への教育の方法や内容についても絶えず、時代とともに進化し続けなければならない。原義から少し離れるかもしれないが，これもまた「歳々年々人同じからず」やである。

今回の学部年報の特集テーマは「私の授業」である。各々の教員が学生への教育に関して変わり続けた証しとしての授業のいまのあり様や変遷を披露することで、学部としての歩みの一端を振り返るとともに、今後のさらなる改善のために読者のご批判を仰ぎたい。